

火星



七曜抄 二

山尾玉藻

猪罨のさう遠くない日向かな

柚子の木に見知らぬコート佇ちてゐし

マフラーの解けてゐたる鹿の前

いつまでも日当たつてゐし川普請

花 柵 空 也 の 息 に 零 れ け り

へ ル メ ッ ト 脱 ぎ て 綿 虫 殖 や し け り

紅 唇 を ぐ い と 拭 へ り 虎 落 笛

落 葉 道 人 の う し ろ の よ か り け り

寒 林 を も ど り て 来 た る 父 の 息

赤 き 灯 の あ る 裏 白 の ダ ン ボ ー ル

玉藻俳句鑑賞

みづうみの真つ平なり手毬唄 玉藻

〔火星〕平成十六年一月号より

「あんたがた何処さ 肥後さ 肥後何処さ 熊本さ 熊本何処さ 船場さ 船場山には狸がおつてさ それを猟師が鉄砲で撃つてさ 煮てさ 焼いてさ 喰つてさ それを木の葉でちよいと隠す」

風もなく一枚の鏡のやうな湖、静けさの極みである。そこには年の新たな澄んだ大気の中、存分に降りそそぐ日の光が満ちている。きらきらとまばゆい光の中から零れてくるのは、遠い日の手毬唄である。七色の美しい糸の綾が跳ねていかにもお正月らしい気分へと誘われる。

(高子)



太白星

柳生千枝子

早逝の子よ露草の青澄めり
想ひ出や露草の蕊黄の灯り
毒茸緋色の笠に惹かれをり
芒原誰かを探しゐるらしき
宣伝機銀一色の芒原
露降りる気配山から夜が来る
ゆく秋の涛音碧し独りをり

杉浦典子

台風の逸れし音色のサキソフォン
手品師のまづは右手の木の実かな

草もみぢ金管楽器立ち上がる
竿釣の三本を守り野分晴
朝顔の種の十粒と籠りをり
紅葉鮎食うべ山姥帰りけり
霧冷の船の灯りの戻りくる

浜口高子

坐る松立てる松あり後の月
雁渡るオランダ館に宅急便
舌を焼くひとり住まひの唐辛子
北狐の残せしどんぐり拾ひけり
大風のあとの糸瓜のずんべらぼう
枯蔦の間に海の凧ぎゐたり
パイプ椅子並べてありぬ返り花

火星作品 山尾玉藻選

虫絶えて海原白き須磨明石 八幡飯塚糸子

立て膝をときどきしたる芋煮会
肩越しに酌受け取りぬ十三夜

どんぐりを握り燈台戻りきし

雄鶏のよく鳴く日なり初紅葉

水音の善峰寺に月待てり 八幡大山文子

灯台に灯の入る鳥羽の雨月かな

秋の雨志摩の漁師の早寝なる

銀杏を拾ふサリーの二人かな

肘ついて食うべて二人衣被

菜畠のぼつた抓みし捨てどころ 大和郡山 木野本 加寿江

水際にコーヒー飲めば雁渡る

眞直角の点字ブロック鰯雲

台風の去りし鉢棚夫の佇つ
猫の背にとまる片脚ばつたなり
指先の暮れきつてゐる菜虫採
起したる畝すぐ乾く秋彼岸
さつきまで空にありたる木守柿
こほろぎの石から石へ鳴きにけり
木菟鳴くや屋根裏にある古机
溝蕎麦の水奔りゐる昏さかな
山茶花の蕾百ある一花かな
鱸綱の雫してゐる後の雛
ひもすがら川鶉のいらふ秋の空
滝口の冷えを掴みし手摺かな
末枯や首振つて馬あるき出す
日の暮の色して通草裂けゐたり
金山の中流れをり秋の水
かりがねや春日大社の朱の柱
種まきし土匂ひけり後の月

明石 戸栗末廣

姫路 松たかし

大和郡山 城孝子

選のあとに

山尾 玉藻

に生れたのである。

肩越しに酌受け取りぬ十三夜 飯塚 糸子

肩越しと言う行為は一般に「肩越しに覗く」と在るように、人の後から前を向いてする行為である。しかしこの句の「肩越し」はいかにも不自然、酒席で一人の背中越しに受けた酌である。正しくは「背中越しに酌受け」なのである。それが理解出来るのは共通体験に因るもの。写生に基づく俳味充分な作品である。

銀杏を拾ふサリーの二人かな 大山 文字

外人を詠む場合興味本意になりがちだが、掲句は全くそれを感じさせず自然である。「落穂拾ひ」程ではないが、上質の絵画的風景がある。

さつきまで空にありたる木守柿 戸栗 末廣

勿論「木守柿」は落ちたのである。さつきまであった鮮明な色彩が消え去り、そこには虚ろな空間が残っているだけである。我に帰った作者はむしろ実像よりも鮮明に残像が脳裏

鱸綱の雫してゐる後の雛 松 たかし

「後の雛」とは九月九日の重陽と同じ日。やはり雛を飾るのであるが、春の雛に対して「後の雛」と言う。伊豆の稲刈りに今も残っているらしい。「鱸綱の雫してゐる」は春では即き過ぎで、やはり「後の雛」である。老婆心ながら、作者がこの行事を見たかどうかはこの作品とは全く関係がない。その句が提出された時、独立した作品として存在するのである。漁村らしい風土が感じられる秀作である。

畑土の乾ききつたる種茄子 廣畑 忠明

「種茄子」は俳人好みの季語であろう。放りつばなしの様がこの季語の在り様である。「乾いてゐたる」ではなく「乾ききつたる」と言つたところに「種茄子」に対する適確な写生が生れた。

島の灯の鳴りだしさうや野分あと 野澤 あき

作者は野分に畑る島を先ず見て知つていたのである。その野分が過ぎ去つた後、空気の澄みに因る島の灯を「鳴りだしさう」と形容したのだ。比喩の象徴力により成功した。(以下略)

恒星圈

深澤 鱧

天高し旧聖堂のドイツパン
トアロード裏の鎧戸ぬのこづち
わだつみへ喧嘩祭の果てにけり
六甲は連山である秋の暮
海彦が古墳の主や鳥渡る

堀 志皋

野澤 あき

馬の名を月によまれて天高し
右脳より左脳に廻る秋の風
チャペルより赤き絨緞鴟の晴
七人に喰べてもらはむ栗を剥く
椿の実弾けし夫の忌日かな

燭台の点してありしラ・フランス
バトミントン逸れし南蛮煙管かな
赤米の稔りに鳴りし電子音
朝顔の小さし軍手を干す垣根
子供達は大阪育ち零余子飯

廣畑 忠明

松 たかし

戸隠に鬼女の伝説雁渡る
黒姫の峯に雲置く秋桜
稲架かけの佐久煙らせて田に焚けり
室堂は地を這ふ風の草紅葉
水門の杭の影揺る秋しぐれ

大釜の伏せあり小鳥来てをりぬ
杉山にけぶりのあがる冬支度
鏑のいろ残る砥石や秋の築
薪束を積み上げてある林檎畑
出征の文字枯蔓のあるばかり